

国際バカロレアの理念からみるグローバル人材育成の意義

—クルト・ハーンに着目して—

本 多 舞

1. はじめに

近年国際バカロレア（International Baccalaureate：以下IB）が注目されるようになったのは、政府や文部科学省がグローバル人材育成の選択肢の1つとして、IB導入を提言したからである。例えば、教育再生実行会議「これからの大学教育等の在り方について」第三次提言（平成25年5月28日）の中で、「国は、国際バカロレア認定校について、一部日本語によるディプロマ・プログラムの開発・導入を進め、大幅な増加（16校→200校）を測る。」と記されており、一条校におけるIB認定校の増加を望んでいることが読み取れる。また、まち・ひと・しごと創生本部で出された「まち・ひと・しごと創生総合戦略（2016改正版）」（平成27年12月24日文書決定）の中では、「国際的に通用する大学入学資格が取得可能な教育プログラム（国際バカロレア）の普及拡大を図り、2020年までに国際バカロレア認定校等を200校以上に増やす（2014年の74校から2016年10月現在で101校に増加）」と明示されており、IBは地域人材育成の手段としても期待されている。

文部科学省がIB導入を推進する理由として、①世界で活躍する人材育成は喫緊の課題、②国際標準に沿うことで人材流動性が向上、③高校における既存のカリキュラムへ良い影響を与える波及効果（永山：2013）の3点を挙げており、語学力のみならず幅広い教養や問題解決力等、国際的に活躍できる人材育成が目標とされ、こ

れらを満たす手段としてIB導入を推進している。

またグローバル人材育成の定義として、政府が進めるグローバル人材育成推進会議「グローバル人材育成推進会議 中間まとめ」（平成23年6月22日）では、グローバル人材に必要な要素として①語学力・コミュニケーション能力、②主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、③異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー、と示され、さらにこれからの社会の中核を支える人材に共通して求められる資質として、幅広い教養と深い専門性、課題発見・解決能力、チームワークと（異質な者の集団をまとめる）リーダーシップ、公共性・倫理観、メディア・リテラシー等としている。

これはIBの理念として「IBの使命」で示されている「多様な文化の理解と尊重」「より平和な世界を築くことに貢献する人材育成」や、「IBの学習者像」の10の目標である「探究する人、知識のある人、考える人、コミュニケーションができる人、信念をもつ人、心を開く人、思いやりのある人、挑戦する人、バランスのとれた人、振り返りができる人」と共通点が多い。

政府の考えるグローバル人材は、生徒が将来社会人として世界規準で働くことや日本経済に利益をもたらす人材を輩出することを想定しているのに対し、IBは世界共通の資格取得の目的のみならず、背景の異なる生徒と一緒に学ばせ

る環境作りや世界平和を築くために設立した経緯があり、人間形成の完成や生涯学習者という目標を通じて世界規準で活躍できる人材育成を期待している。

このように社会人として、さらには人間として世界規準で通じる人材育成も期待される IB プログラムの中で、後期中等教育修了資格を得られるディプロマ・プログラムには、教科の他に「コア」と呼ばれる3つの必修要件があり、すべてを実践しなければ資格習得できない。「コア」の1つである「創造・活動・奉仕」(creativity, action, service : 以下 CAS) は、活動評価が点数化されないにも関わらず、3つの必修要件の1つに含まれており、IB における CAS の重要性は明らかである。

CAS はドイツの教育者であった Kurt Hahn (以下クルト・ハーン) の教育理念に基づいて開発されたカリキュラムである (Hill 2010:81)。

そこで本稿では、IB 設立に多大な影響を与えたクルト・ハーンに着目し、彼の教育理念が IB のカリキュラム設計へどのように具現化されたのかを明らかにすることで、グローバル人材育成との関係を検討することを目的とする。

まず、IB 設立に関わった人物の文献から IB の成立過程を整理する。さらに国際バカロレア機構 (International Baccalaureate : 以下 IB 機構) が提供している資料より、CAS の特徴や活動の目的を明らかにした上で、クルト・ハーンの教育理念がどのように CAS へ具現化されたのかを検討し、CAS の理念とグローバル人材育成との関係を考察する。

2. IB の歴史と理念

2-1 IB の前史と成立

2度の世界大戦を経験したヨーロッパでは、戦後の新しい時代を担うため、国際的視野を持った人材育成が必要となった。20世紀後半以降、特に経済・産業分野における国際化が進み、外交官や国連職員・外資系企業で働く人々が増加した。それに伴い、海外に住む生徒・海外から帰国した生徒・海外へ行く可能性の高い生徒が増え、海外での滞在期間が長期化するケースも

多くなった。このような状況下で、ヨーロッパ諸国のインターナショナル・スクールには様々な国籍の生徒が集まるようになる。各国の大学入試制度が異なるため、生徒は希望する国の教育制度に合わせて試験対策を準備する必要があった。

1924年に国際連盟幹部等によって設立された世界初のインターナショナル・スクールであるジュネーブ・インターナショナルスクール(以下 Ecolint) では、すでに様々な国籍の生徒を受け入れていたため、進学希望国により生徒を4つの小グループ(イギリス: G.C.E.A-Level、フランス: baccalauréat、スイス: maturité fédérale、アメリカ: AP 等)に分けていた (Peterson 1987: 17)。しかし戦後の国際化に伴い、駐在者や大学入学希望者が多国籍化し、様々な国の資格取得のニーズが増え、教員がすべての資格に対応することに困難が生じるようになる。

このような課題を解決するため、どの国で後期中等教育を修了しても生徒が希望する国の大学入学が可能な、各国共通の資格制度の必要性が高まったのである。そこで Ecolint の教員を中心としたメンバーにより、1951年にユネスコと協力関係を持つ International School Association (以下 ISA) が設立され、ユネスコや20世紀基金からの融資を受けながら新しいカリキュラムや試験の開発を開始した (Peterson 1987: 15)。その後1965年には、スイス民法典に基づいた非営利団体としての法的地位を確立した International Schools Examination Syndicate (以下 ISES) が設置され、ISA から独立した組織として新しいカリキュラムや大学入学資格の制度作りを行うこととなり、これが後 IB 機構の骨組みとなる (Renaud 1974: 4)。

一方、世界各国から選抜された高校生を受け入れ、高等学校2~3年生の2年間寄宿舎生活を通じて学び合うことで、国際感覚豊かな人材育成を目標とする国際的民間教育機関の United World College (以下 UWC) は、1962年にアトランティック・カレッジ (以下 AC)

を創立した。当時 AC は G.C.E.A-Level を採用し英語を指導言語としていたが、英語圏以外の生徒や教員にとって、外国語である英語の試験準備をするのは困難かつ不利であったこと、G.C.E A-Level がヨーロッパ諸国の大学入学資格として適応しなかったこと、イギリスの社会科学カリキュラムを他国の生徒が学ぶ必要があったことから、新しいカリキュラムの開発が求められるようになった (Peterson 1987 : 17)。

ISES は、当時オックスフォード大学の教授であった A.D.C. Peterson (以下ピーターソン) を委員長とし、インターナショナル・スクールにおける課題を解決するための様々な研究を行う機関として、オックスフォード大学内に研究所を設置し IB 機構と改名し、翌 1968 年に初代 IB 機構事務総長としてピーターソンが就任したのである。

2-2 クルト・ハーンについて

前節で述べたように IB は戦後の国際化に伴い、母国以外で後期中等教育を修了する生徒に対し、各国の大学入学へのアクセスを円滑にするために考案されたプログラムである。IB 設立に関わったピーターソンは、NATO によって 1957 年に催された国際教育学会で初めてドイツの教育者クルト・ハーン (1886 - 1974) と出会い、ハーンの教育理念に賛同し影響を受けた。異なる国籍の若者をまとめることや各生徒の偏見を克服させること (Peterson 1987 : 3) という、設立当初における IB の目的にもハーンの影響が反映されている。

クルト・ハーンはユダヤの血を引くドイツ人で当時最も著名な教育者の 1 人であった。ハーンはベルリン大学・グッティンゲン大学・クライストチャーチ大学・オックスフォード大学で学んだ後、バーデン公マックスの政治秘書を務めた。第一次世界大戦後、次世代をになう青少年の教育を通して平和を築くことを決心したハーンは、政界を退いたバーデン公と共に 1920 年 4 月ドイツにザレム・スクールを設立し、校長に就任した。設立当初、この学校は男子生徒のみの寄宿舎生活を通じた学び合いを実践し

ていたが、ハーン教育理念を踏まえ以下のような 7 原則を制定した。

- ①若者に自己発見と挑戦に立ち向かう機会を与えよ。
- ②若者に勝利と敗北の経験を提供せよ。
- ③個人的な野心の前に共通の財産を追求することを教えよ。
- ④静かな時間を作り、熟考するための空間を提供せよ。
- ⑤先を読み計画を立てる想像力と能力を鍛えよ。
- ⑥スポーツやゲームを真剣に取り組むが、支配的になってはいけない。
- ⑦裕福で権力のある両親を持った子供たちを麻痺した特権階級意識から解放せよ。

(ザレム・スクールの 7 原則より筆者訳)

この時代にハーンの教え子だったトーマス・マンの息子ゴーロ・マンは、ハーンとの出会いや印象深い体験を「ドイツの青春 1」で鮮明に描いている。当時のザレム・スクールにおけるハーンの様子を以下のように述べている。

ハーンには高い知能と着想の豊かさが備わっており、ユーモアもあり、熱い信念もある。しかも、そうしたものがどんなときにも示されるのだ。そうやってハーンは人を納得させてしまい、そうやって献身的な協力者を見つけ、そうやってお金を集めてくる、そして、いつでもどこでも進んで助けてくれる人に会ったのだ。ハーン自身は裕福な家に生まれたが、仕事は無報酬でやってきたし、寄付や寄贈もしたから、自分が窮地に陥ることもたびたびあった。本来は優れた理論家ではないのだろう、書いたものはわずかしかない — この人は行動家なのである。ハーンの意図したものいくつかは、今日でもなお実にさまざまな国や大陸の、ハーンによって作られた学校やこの人からインスピレーションを得て作られた学校で、活かされているが、それは、ハーンとつきあいのあった人々のあいだを反響し合いながら今日まで伝わってきた、ハーンという人物の遠いこだまのような

ものだった。(マン 1993 : 142-143)。

この記述から、多くの生徒や理解者たちがハーンの理念に賛同し魅了されていたことが伺える。マンの言う通り、ハーンの強い信念に基づいて作られた学校や組織は時を経て現在まで脈々と続いており、主な功績は以下の通りである(表1参照)。

表1 クルト・ハーンが設立した主な学校・組織一覧

ザーレム・スクール (1920年設立)
ゴードンストウン・スクール (1934年設立)
アウトワード・バウンド (1941年設立)
英国エディンバラ公国際アワード (1956年設立)
アトランティック・カレッジおよびユナイテッド・ワールド・カレッジ (1962年設立)
ラウンドスクエア (1967年設立)
国際バカロレア (1968年設立)

ハーンは第一次世界大戦の経験を踏まえ、国籍や背景の異なる若者をまとめることや、戦争や宗教などによる各生徒の偏見を克服させることを目的とし、ザーレム・スクールでは戦時中敵同士であったドイツ人とイギリス人を一緒に学ばせていたが、当時台頭してきたヒトラー率いるナチスがこの画期的な出来事に関心を持ち、ナチス化するための手段としてハーンを利用しようと企んだ。リベラルな考えの持ち主だったハーンは、ナチスの申し出を拒否したばかりか、全生徒に対して「ヒトラーを捨てるかザーレムを捨てるか」という勇気のいる選択をさせたのである (Peterson 1987 : 2)。このような彼の行動は、ナチスの逆鱗に触れ、彼は投獄されてしまう。

その後バーデン公らの助けを借りイギリスへ亡命したハーンは、1934年にゴードンストウン・スクールを設立した。学校のモットーは「There is more in you (than you think)」で、知的・文化的・肉体的・社会的・精神的発達を通じて、生徒の可能性を生徒自身に理解させることを目標としており、4つの柱として

「Challenge・Responsibility・Service・Internationalism」を教育原則とし、教育は知識や技能の修得のみでなく、学ぶ喜び・精神力・理解力を身に付けることの重要性を説いている。

1941年に設立されたアウトワード・バウンドは、当時の若者が体力・精神力・挑戦する気持ち等が不足している事を痛感したハーンが、若者を強化するために考案したプログラムで、大自然を舞台にしたチャレンジングな冒険活動(登山遠征、ロッククライミング、沢登り、カヤック、ヨットなど)に取り組み、そこから自己に秘められた可能性や他人を思いやる気持ちなどの豊かな人間性を育むことを目的とする活動である。子どもたちに対しても机上や日常生活では体験できない大自然の中での様々なチャレンジを通し、人として成長していく上での原点となる、「生きる力」を育むプログラムを提供している。アウトワード・バウンドの柱として「Fitness Training・Expeditions・Projects・Rescue Service」の4つが挙げられており、これらはCASの理念や要素へ反映された。

また、IB設立の1年前に設立されたラウンドスクエアでは、ハーンは6つの教育の柱としてIDEALS (Internationalism・Democracy・Environmentalism・Adventure・Leadership・Service)に基づいて教育的活動を行うことを定めた。

このようにハーンの設立した学校や組織における教育理念をまとめると、ハーンは第1に「自己発見」や「挑戦」に立ち向かう勇気を持つこと、第2に文化や背景や身分の違いに関係なく、教育においてはすべての者が平等であること、第3に体力を促進し心技体を強靱にすること、第4に奉仕の精神を忘れないこと、第5に国際性を認識すること、を主眼に置いていると解釈できる。

このようにハーンが設立した様々な教育プログラムや組織の理念は、「多様な文化の理解と尊重」「より平和な世界を築くことに貢献する人材育成」「生涯学習者」をキーワードにした「IBの使命」にも取り入れられている。

これ以外にもハーンの教育理念は「コア」と

呼ばれる3つの必修要件のプログラムにも具現化され、さらにピーターソンが強調している「全人教育」や「自己の内的環境と外的環境の両面における、身体的、社会的、倫理的、美学的、精神的な側面を理解し、修正し、享受するために、個人の能力を最大限に育てる」「行動する意志」(Peterson 1987: 33)と共に「コア」のプログラムが形成されたと考えられる。

3. IB プログラムの概要

各国の後期中等教育制度や試験内容が異なる中、IBはバランスの取れた科目設定と思考力育成を重視し、後期中等教育修了兼大学入学資格として認証されるプログラムとして考案された。そのため成立当初はディプロマ・プログラムが開発されたが、現在は3歳～12歳対象のプライマリー・イヤーズ・プログラム (PYP)、11歳～16歳対象のミドル・イヤーズ・プログラム (MYP)、16歳～19歳対象のディプロマ・プログラム (以下 DP) とキャリア関連プログラム (CP) の4つのプログラムから成っている。本稿ではDPの「コア」と呼ばれる必修要件について検討することから、DPカリキュラムのみを扱う。

ピーターソンは、後期中等教育段階で大学やその後の人生において必須となる知識や技術を準備することにも重点を置くため、以下の6グループ(教科)と「コア」と呼ばれる3つの必修要件から構成されている(表2参照)。生徒は進路に関わらず、6教科の中から各1科目を選択し、3～4科目をHL(上級レベル:各240時間)、その他をSL(標準レベル:各150時間)で学習する。

表2 DPのカリキュラム

グループ名	科目例
1 言語と文学 (母国語)	言語A:文学、言語A:言語と文化、言語と演劇(※)
2 言語習得 (外国語)	言語B、初級語学
3 個人と社	ビジネス、経済、地理、グローバル政治、歴

会	史、心理学、環境システムと社会(※)、情報テクノロジーとグローバル社会、哲学、社会・文化人類学、世界の宗教
4 理科	生物、化学、物理、デザインテクノロジー、環境システムと社会(※)、コンピューター科学、スポーツ・運動・健康科学
5 数学	数学スタディーズ、数学SL、数学HL、数学FHL
6 芸術	音楽、美術、ダンス、フィルム、文学と演劇(※)

(※)なお、「文学と演劇」はグループ1と6の横断科目、「環境システムと社会」はグループ3と4の横断教科、「世界の宗教」および「スポーツ・運動・健康科学」はSLのみ。

3つの必修要件

- ・課題論文 (Extended Essay : EE) 履修科目に関連した研究分野について個人研究に取り組み、研究成果を4,000語以内(日本語の場合は8,000字以内)の論文にまとめる。
- ・知の理論 (Theory of Knowledge : TOK) 「知識の本質」について考え、「知識に関する主張」を分析し、知識の構築に関する問いを探究する。批判的思考を培い、生徒が自分なりのものの見方や、他人との違いを自覚できるよう促す。最低100時間の学習。
- ・創造性・活動・奉仕 (Creativity/Activity/Service : CAS) 創造的思考を伴う芸術などの活動、身体的活動、無報酬で自発的な交流活動といった体験的な学習に取り組む。
(文部科学省のホームページより引用)

DPの各科目における目標・内容・評価方法は、国際的視野を育成することを目指して設定されており、生徒が将来新しい環境に置かれても適応可能な学習方法や知識の習得を目標としている。加えて、生徒が生涯自立した学習者になるための学び方や思考力を学ぶことに重点が置かれる。さらにピーターソンは、全人教育の完成には余暇を楽しむ機会を増やすことも含まれると考え、学術的な学習や社会で必要とされる力の習得のみならず、体験学習や探究学習を通して学問の楽しさも経験させ、各生徒の創造性や個性も尊重するプログラムを考慮した。そのため、グループ1～6の教科のみならず、「コア」の実践も重視され、人間形成に貢献する学習や活動も重視している。また同時に、将来国

際社会で文化や背景の異なる人々を尊重・理解しながら共存していくことを予測し、偏見を持たずに平和な社会を育む人材として活躍できるよう、DP のカリキュラムは多面的なアプローチから「グローバル社会で生きる力」の育成を目指していると言える。

4. CAS について

4-1 CAS の成立過程

「コア」と呼ばれる3つの必修要件の中で、クルト・ハーンが強調した「知識の活用」と「机上以外の学習」の重要性を具現化するため、CAS は IB 設立当初から考慮されてきた活動である。DP のカリキュラムは時代と共に変化を遂げており、CAS も様々な過程を経て現在の形へと変容している。

1968 年に DP プログラムが開始された当初、週 1 回午後に行われる必修授業「芸術の理論的かつ実践的入門」として始められたものが CAS の基礎となっており、その後 1970 年に「身体的および社会的奉仕活動」が加えられた (Hill 2010 : 80)。つまり美的 (創造的なこと)・身体的 (スポーツや運動等)・社会的 (学内外を問わず奉仕活動) に積極的に関わることに重点を置き、学術的達成度の認知のみならず全人教育に貢献することの重要性を示している (IB 1970 : 14)。このような活動の導入はクルト・ハーンの信念の影響と、すでに彼によって導入されていた AC における実践の影響を受けている。1980 年には創造的・美的・社会的奉仕活動を実践すること (creative and aesthetic activity, and social service : 以下 CASS) として示されるようになり、1989 年には CASS から CAS へと名称変更され、1992 年より正式で専門的な基準を備えた CAS が完成した (Hill 2010 : 82)。

このように IB 成立当初から考慮されていた CAS の活動内容は、現在の形に至るまで緩やかな変容が見られるものの、現在に至るまでクルト・ハーンの信念である「自己発見」や「挑戦」、「教育においてはすべての者が平等であること」「奉仕の精神」「国際性」等に焦点をあて、知識

の習得のみならずバランスのいい人間形成を目指すべき目標としている事が分かる。

4-2 CAS の活動内容

CAS は「創造性」「活動」「奉仕」の3つの要素で構成され、18 カ月にわたるプログラムの取り組みを通じ、音楽が得意な生徒であれば、ヴァイオリンの演奏曲を作曲してグループを作って録画・録音して披露する、地域内の子どもたちのためにリサイクル素材を利用して洋服やバッグをデザインし制作する等のプロジェクトに少なくとも1つは参加する。そして「7つの学びの成果」(表3参照)を達成することにより修了となる。

表3 7つの学びの成果

学びの成果1	自分の長所と成長すべき点を認識する
学びの成果2	課題に挑戦し、その過程で新しいスキルを習得している
学びの成果3	自ら CAS を計画し開始することができる
学びの成果4	CAS 活動を継続し、やり遂げる粘り強さを示す
学びの成果5	自らのスキルを活かし、また他者と共に活動する意義を認識する
学びの成果6	グローバルな課題に取り組む
学びの成果7	選択と行動の倫理を認識し、考察する

(IB 2015 : 14 より引用)

CAS は活動内容に対し点数化される学習評価はないが、以下のような条件が伴う。

① 4つの規準

- ・意味のある成果をもたらす具体的な経験と目的を伴う活動
- ・個人的な挑戦 : 挑戦する課題は生徒の成長を促すもので、達成可能な範囲のものであること
- ・計画や、プロセスの見直し、報告などでの深い考察
- ・成果および個人的な学習についての「振り返り」

②3つの要素

「創造性」「活動」「奉仕」の最低1つに該当していること

(IB 2015 : 3 より筆者作成)

この他に CAS 活動として相応しいものであるかが問われ、活動段階は「調査→準備→行動→振り返り→実際に示すこと」の順で進めることが奨励される。さらに「7つの学びの成果」を達成したことを示す証拠として、各生徒が CAS ポートフォリオに記録していくことを求められる。

この活動はハーンやピーターソンの信念を基に具現化された活動のため、単に机上で思考・判断・表現するだけでなく、実際に学内外でスポーツ・芸術活動・地域社会活動等に参加するといった行動に移すことが重要である。個人または集団での経験を通して、自己決定する→他者と共に活動する→目標を達成する→達成感を得る、という一連の経験学習と振り返りのプロセスを蓄積し、生徒の内面や社会性の成長を促進していく。

5. CAS とグローバル人材育成の関係

「創造性」「活動」「奉仕」に焦点をあてた CAS の活動の中で IB の特徴の1つは、「グローバルな課題に取り組む」ことが学びの成果として必須条件に組み込まれていることであろう。

DP の「コア」である EE・TOK・CAS すべての目標は、「国際的な視野を育む」事であり、「IB の使命」のキーワードである「多文化理解」「平和な世界を築くことに貢献する人材育成」「生涯学習者」の育成に基づいたプログラムとなっている。そのため、CAS においてもグローバルな意義を持つ探究を推奨し、ローカルとグローバルの関連性や多文化理解を認知することで、その後の生徒の人生に反映されることが望まれている。

このことは、文部科学省の示す「海外・外国人と仕事や生活の中でコミュニケーションを図ることをごく自然のものと捉えることを容易にする可能性」(永山 2013 : 331) と連動してい

る。生徒が将来社会人となり生涯学習者となる上で、多様性や多文化理解を認知した上でコミュニケーション力や語学力を発揮することが、グローバル人材の要素の1つと考えられるからである。

また、矢野が CAS について「質の高い中等教育の不可欠の属性として、こうした活動を学習の中核的な部分に組むことこそ、これからの市民を育てる高等学校教育課程のあり方を考えるうえで重要な示唆を与えているように思われる。」(矢野 2012 : 33) と述べているように、今後日本の教育現場で地域・母国・世界等を意識した芸術的活動や奉仕活動を実践することは、グローバル人材や人間形成を育成することに貢献できると考える。従来からの日本の教育の良さを担保しつつ、更なる改善を行うために CAS の活動内容や評価に関する基準から様々な示唆を得ることが期待される。

6. 今後の課題

本稿では現在グローバル人材育成の一環として、文部科学省が推進している IB の中で DP に焦点をあて、唯一点数化されない CAS の成立過程や理念を辿ることで、グローバル人材育成に CAS がどのような影響を与えるかを検討してきた。

クルト・ハーン教育理念は、心技体の強靱化・全人教育・多文化理解などを重視しており、これらの理念は現代の子どもたちが世界で活躍するために必要な条件と重なる。

確かに日本で CAS を導入する際、教員が CAS のねらいの本質を理解できるか、学内外で活動する生徒の危機管理を如何にするか等、いくつかの課題も山積する。

そこで今後は、一条校で IB 認定校に在籍している生徒や卒業生へのアンケート調査を行い、CAS 活動を通じて生徒が何を受容したのか、CAS におけるグローバルな課題にどう向き合ったかについて調査すると共に、CAS を担当する教員へのインタビュー調査を実施し、様々な課題にどのような対応で解決を試みているかを明らかにし、その結果から CAS がグローバル

人材育成に与える効果や課題について考察していきたい。

引用文献

- ゴーロ・マン (1993) 『ドイツの青春1』 みすず書房
- 永山賀久 (2013) 「グローバル人材育成と国際バカロレアについて」『化学と教育』61 巻 7号, pp330-333
- 矢野裕俊 (2012) 「国際バカロレアとの比較を通してみた高等学校教育課程の現状と問題点」『武庫川女子大学大学院教育学研究論集』第7号, 27-34)
- A.D.C.Peterson (1987). *Schools across frontiers : the story of the International Baccalaureate and the United World Colleges*. Open Court Pub.Co.
- A.D.C.Peterson (1972). *THE INTERNATIONAL BACCALAUREATE*. CEOGE.HARRAP&CO.LTD.
- Gerard Renaud (1974). *Experimental period of the International Baccalaureate: Objectives and results*. The Unesco Press.
- Ian Hill (2010). *The International Schools Journal Compendium volume IV : The International Baccalaureate : pioneering in education*. A John Catt Publication
- International Baccalaureate (2015) 『『創造性・活動・奉仕』(CAS) 指導の手引き』
- ゴードンストウン・スクール <http://www.gordonstoun.org.uk/unique-curriculum> (2017/01/29 閲覧)
- ザーレム・スクール <https://www.schule-schloss-salem.de/en/about-us/history/the-seven-laws-of-salem.html> (2017/01/29 閲覧)
- 文部科学省 http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/ib/1308000.htm (2017/01/29 閲覧)